シリーズ
虹色のひろば

衣鉢を継ぐ者

金井秀行

人民の側に立ち続けた「知の巨人たち」が相次いで去りました。しかし後に残った者は悲しんで落ち込んでいていいのかと思います。巨人は黙って立ち去ったか？何もメッセージを遺さなかった？否、と事実が答えます。中村哲医師が去ったあとに満々と水を湛えた運河が残りアフガンに緑を甦らせています。内橋克人、色川大吉両氏も強いメッセージを遺し多くの衣鉢を継ぐ者を育ててきました。

お二人の事蹟については、その著作に精通している人の論評を待つこととし、ここでは寺田寅彦の衣鉢を継いで活躍した中谷宇吉郎について書きます。

随筆集（岩波文庫）に「簪を挿した蛇」が載っています。これは、石川県の西のはずれに古くから伝わる話で、山奥によくある落城秘話伝説の一つです。宇吉郎少年は科学とは対極的な迷信と言い伝えの世界にどっぷりとつかって育ちました。それなのに後に振り返って考えると、混沌として掴み所のない環境こそ豊かな発想の温床ではなかったかと思うようになります。そして言います。「本当の科学というものは自然に対する純真な驚異の念から出発すべきものである。不思議を解決するばかりが科学ではなく平凡な世界の中に不思議を感ずることも科学の重要な要素であろう」「本の方は近年面白くて為になるといういい本が沢山出てきたようである。それらを自由に読むことができれば子ども達は大変幸せである。しかし余り栄養物ばかり食べさせておくと芯が弱くなる虞がありはしないかという気もする。たまには面白くて為にならない本も読ませた方が良さそうである。」

これには虚をつかれました。子どもの頃も教員になってからも「面白くて為になる本」を追究してきた身にすれば晴天の霹靂です。この主張の裏には「大人があまりやきもきすると子どもは興味を失ってしまうことが多い」という著者の思いがこめられています。卓見だな！と認めざるを得ません。

この随筆、昭和 21 年 12 月に発表されました。ところがその 3 年前、著者は同じテーマでもっと具体的に踏みこんだ「西遊記の夢」を発表しています。なので「簪～」の方はそれを要約、圧縮した普及篇といえます。成人となった著者は、少年時代没頭した西遊記の世界の言わばウラを取るべく、いろいろな文献に目を通していきます。この文献の渉猟が物理学者の鋭い眼を感じさせます。「夢を掘り当てた人」シュリーマンの情熱さながらです。興味深いのは、文部省選定の「西遊記」でない、もっと野趣豊かな「西遊記」に惹かれて読み耽る子どもたちの姿です。著者は驚き呆れながらも「血」を感じて嬉しくないわけはなく、次々と「証拠」の痕跡を、女の子一人を含む三人の子どもに見せていきます。このハラハラドキドキ感は、戦後生まれで映画・テレビの世界に浸った自分の過去と重なって、興奮をおさえきれません。

これを書いている間にも有為転変は止まらず世界中に木を植え続けた宮脇昭さんの訃報に接しました。私たちが今どう生きるかが益々問われているなと思いました。

※「衣鉢（いはつ）を継ぐ」
「衣」は、僧が着る袈裟。「鉢」は、僧が托たく鉢はつのときに用いる鉢。仏教の奥義を師から弟子が授けられる（受け継ぐ）こと。また、各分野で先人から業績を受け継ぐこと。
（編集部注）